

朝鮮女性の視点から見た 3・1 独立運動

宋 連 玉

- 1 韓国国民のアイコン，柳寛順
- 2 長い女性人権闘争の始まり——3・1 独立運動以前
- 3 女性たちの「独立戦争」——3・1 独立運動以後
- 4 朝鮮女性の視点から見なおす3・1 独立運動

1 韓国国民のアイコン，柳寛順

韓国で3・1 独立運動といえばすぐに連想される人物は誰か？ 3・1 独立運動100周年を来る3月に迎えるにちなみ，韓国で世論調査をしたところ，柳寛順が全体の82%を占めて首位に選ばれた。金九や安重根，尹奉吉を押さえての結果である。

2月27日からは映画『抗拒，柳寛順』が封切られ，2月1日から1カ月間，柳寛順の叙勲等級3から等級2への格上げ署名活動が進められている。

朝鮮民族が解放を迎えるまで無名だった柳寛順が，韓国国民のアイコンになった背景に何があったのか。

解放を迎えた朝鮮民族が最初に着手したのは3・1 独立運動の記憶と記録だった。雑誌『新天地』⁽¹⁾でも創刊直後の1946年3月に3・1 独立運動の特集を組んでいる(資料1)。

この特集で女性を書いたものに，黄愛徳(1892-1971)⁽²⁾「3・1 運動と女性の活躍」，朴順天(1898-1983)「女子独立運動者の回顧」，盧天命(1912-1957)「金命時將軍の半世紀」があるが，ここでは柳寛順は特別に注目されていない。

3・1 独立運動は政治的立場を越えて民族全体が共有する歴史であるが，とりわけ右派・親日派は日本の侵略戦争に加担した近い過去を消去するために3・1 独立運動に特別な意味を付与しようとした。

資料1 雑誌『新天地』創刊号



(1) 1946年1月にソウル新聞社によって創刊され，1954年9月までに68号まで出したと伝えられる総合雑誌である。解放後から朝鮮戦争前までに出版された雑誌のなかでもっとも成功したといわれ，部数も3万部を超えた。

(2) 黄愛徳(エスター)として知られていながら，黄愛徳と自称させたのは解放空間の高揚する民族主義であろう。

資料2 柳寛順, 受刑者記録表
の写真(独立記念館提供)



鄭尚雨の研究、「3・1運動の表象‘柳寛順’の発掘」⁽³⁾によると、柳寛順を3・1独立運動のアイコンとして見出したのは朴仁徳(1897-1980)だという。母校の梨花学堂で教師をしていた朴仁徳によれば、彼女が同校の学生だった柳寛順を知ったのは3・1独立運動に加わったことで獄に囚われた、その時だったそう(資料2)。

朴仁徳は女子教育と女権伸長をめざして幅広く社会活動を行っていたが、1927年に女性宣教師の後援でアメリカ留学をし、1931年に学位を得て朝鮮に戻る。金マリア、黄愛施徳、金活蘭(1899-1970)とも親交があったが、総動員体制期には朝鮮臨戦報国団の発起人として日本の侵略戦争に協力をした経歴から今日の韓国では親日反民族行為者とみなされている。

1939年に梨花女性専門学校の校長に就いた金活蘭も、朴仁徳と同じく日本の侵略戦争に協力したことで親日反民族行為者とされている。

朴仁徳が1945年には柳寛順を右派「民族主義」のアイコン作りに着手したのに合わせて、1947年9月には「柳寛順烈士記念事業会」が組織され、右派系の指導者67人が顧問に迎えらる。1948年から柳寛順の伝記本が刊行され、朝鮮戦争後の1954年に小学校の教科書に独立した単元として取り上げられるようになる。

やがて実像の柳寛順に、無垢な少女、敬虔なキリスト教信者、透徹した愛族精神などの脚色が加えられて、朝鮮のジャンヌ・ダルクという物語がつくられる。前述の鄭尚雨によると、それを合作したのは朴仁徳、金活蘭といった梨花学堂関係者、米軍政、右派人士によるという。

神社参拝に抵抗して閉校になった崇義女学校とは違い、梨花学堂は侵略戦争に協力することで学校の存続を図ったために、帝国日本の敗亡後に学校ぐるみで歴史を修正する必要に迫られた。

反共を国是としてきた韓国の政治権力からすると、抗日闘争を3・1独立運動に閉じ込めることで、社会主義という地雷、その対極の親日行為という地雷を踏まずに、自らの不都合な過去を見えなくする保護色を得ることである。言い換えると、3・1独立運動に参加した人びとの多くが、その後社会主義思想に依拠して抵抗し続けたが、その歴史に触れることは解放後一貫して反共を国是としてきた韓国の正史の矛盾を暴露するからである。

その意味で韓国現代史における3・1独立運動の語りは地雷を踏まないように狭い時空間に閉じ込められてきたのである。以後、3・1独立運動の精神は自由・反共精神などの政治理念として具体化され、その中心に据えられた柳寛順は広く国民的認知を得るようになる。

李承晩政権(1948-1960)に続く朴正熙政権(1961-1979)は、以前にも増して反共色を強めた軍事独裁だった。この政権のもとで1962年に柳寛順は5等級の3番目にあたる建国勲章独立章を与えられ、翌1963年には生家の横に記念碑が建立される。

さらに、歴史教科書問題が日韓の外交問題に発展した1982年に、柳寛順は再び脚光を浴びて肖

(3) 韓国歴史研究会『歴史と現実』74号、2009年。이세영「유관순 ‘국민누나’의 탄생」『한겨레』2009年2月9日、http://www.hani.co.kr/arti/society/society_general/341163.html (2019年2月3日アクセス)。

像切手が発行された(資料3)。このように「官製民族主義」のアイコンとして柳寛順が活用されてきたのである。

資料3 1982年に発行された柳寛順の切手



2 長い女性人権闘争の始まり——3・1独立運動以前

(1) 女性をめぐる朝鮮社会事情——韓末から「韓国併合」まで

帝国日本は植民地支配において、朝鮮女性の社会的地位が古来から一貫して低かったという言説を活用してきた。

1935年12月に京城(現、ソウル)府民館で朝鮮総督の宇垣一成が行った講演「朝鮮婦人の覚醒を促す」⁽⁴⁾もそれを裏づける。

すなわち、「婦人の人格は今日迄極めて低い程度にしか認められておらないような有様にて、殆ど社会と隔離し陰鬱なる内房裡に蟄居して、人生の栄枯浮沈の一切を挙げて男子に任じ、夫れの附随者として酔生夢死に甘んぜざるをえない境遇に置かれておる(中略)何れも朝鮮婦人が無識であり、固陋であり、無自覚であり、所謂時代の動きに対して目覚める程度の著しく低い」として、「無知蒙昧」に生きる朝鮮女性像を強調する。

1935年といえば、疲弊する農村の危機に対処して農家経済更生計画が拡大され、天皇制イデオロギーの注入とともに、女性労働力を活用する必要性に迫られていた時期である⁽⁵⁾。

果たして宇垣の講演で描かれた女性像は歴史の実態を正確に映し出しているだろうか。

韓国における最近の女性史研究によれば、18世紀半ばから19世紀にかけての女性による知的業績が明らかにされている。性差別的な社会規範を批判し、あるべき夫婦関係の理想を説いた金浩然の『自警篇』、家政学全書といえる李憑虚閣の『閨閣叢書』、生理学を女性の視点で新たに解釈した任允摯堂の『允摯堂遺稿』、男性も胎教に加わるべきだと主張した李師朱堂の『胎教新記』、金錦園による女性の旅行記『湖東洛西記』⁽⁶⁾など、宇垣の女性像を裏切る朝鮮王朝時代の女性の知的蓄積が厳然と存在した。

しかしながら日本の支配下にあつて、それまで主にハングルで培ってきた女性文化は否定され、日本語と日本文化が強要されるなかで、女性の自立がどれほど実現しただろうか。むしろ宇垣の発言は女性への愚民化政策を糊塗しようとする植民地権力の政治的意図をあらわにする。

朝鮮女性にとって日本による1895年の閔妃殺害は女性に加えられた国家暴力そのものである。民衆の抵抗のかたちともいえる流言飛語は、王妃への性的辱めも臭わせながら、巷の女性たちの怒りの輪を拡大していった。

同時期の1890年代に朝鮮は食糧供給基地に編成され、朝鮮米の日本への輸出が急増するに伴い米価が高騰し、それにより農民、都市住民の生活が圧迫された。女性たちは生活の現場から帝国日本の侵略を感じつつあった。

閔妃殺害の際に起こった義兵闘争が1907年前後から一般民衆も含めて本格化するが、義兵を

(4) 朝鮮教育会(1936)『文教の朝鮮』1月号。

(5) 李憲昶(2004)『韓国経済通史』法政大学出版社、376頁。

(6) 奎章閣韓国学研究院(2015)『朝鮮時代の女性の歴史——家父長的規範と女性の一生』明石書店。

「暴徒」とみなす日本軍は義兵を出した村落の女・子供にまで容赦なく武力を行使した。

同時代に全国的な広がりを見せたのが対日本の国債報償運動であるが、そこに多くの女性が代々大切にしまってきた宝飾類を差し出して運動に加わった。1907年春に結成された国債報償脱環会や三和港（現、鎮南浦）佩物廃止婦人会などはその代表的な組織である。

やがてこれらの運動は男女平等を求める思想へと深化する。同時に近代教育を受けた「新女性」のなかから持続的に独立運動を闘うための理論と実践の模索が始められる。

（2）植民地権力の女性政策——理念は「賢母良妻」

私学の女子教育は1886年の梨花学堂設立から始まるが、公式的な制度教育は1908年から発足する。同年4月に大韓帝国政府は高等女学校令を發布し、官立漢城女学校を設立する。つづいて朝鮮総督府は朝鮮教育令（1910年）を制定し、中等教育機関としての女子高等普通学校（以下、女高普）を設立する。

朝鮮に在住する日本人を対象とした学制に比べ、朝鮮人の教育年限は初等課程では2年、中等課程で1年少ない差別的な学制だった。そのうえ女子の中等課程（女子高等普通学校）の在学期間は3年で、男子の高等普通学校より1年短かった。それ以上の高等教育に入学するには、高等普通学校卒業者、または同等以上の学力をもつ者でなければならなかったが、制度そのものが女性の高等教育進学を阻むものであった。

教育内容も家政、裁縫、手芸等に多くの時間を割き、女性が従来家庭で母親から学んできた伝統的な知識を教科目にしただけの「賢母良妻」養成教育であり⁽⁷⁾、女性の社会進出や経済的自立に役立つものではなかった。

1912年に制定された朝鮮民事令も「明治民法」（1898年施行）を依用し、妻は法的行為者として無能力とされた。女性は男性戸主の強い権限の下におかれ、従属的な地位が法制化された。親族・相続は慣習によるとされたが、1908年からの実地調査は「上流社会」男性の認識をもとにし、地域・階層による多様な「慣習」は考慮されなかった。済州島や咸鏡道のような中央から隔たった地域では、女性をめぐる慣習は必ずしも性差別的でなかったが、慣習を権力に都合よく解釈し、妻は夫に絶対的に服従するイメージがステレオタイプ化されていく⁽⁸⁾。

（3）高等教育をめざして帝国日本の心臓部へ

女性差別的な中等教育に満足できない女性たちは、自らのエンパワーメントのためにそれ以上の教育機関で資格を得なければならない。そのためには海外への留学の道しかなかった。

その留学先として日本は欧米より渡航費、生活費、学費が安く、文化的にもギャップの少ない地

(7) 朴貞愛「初期‘新女性’の社会進出と女性教育（초기‘신여성’의 사회진출과 여성교육）」『女性と社会（여성과 사회）』創作と批評社（창작과 비평사），11号，2000年，48-52頁。

(8) 野木香里（2001）「朝鮮における婚姻の「慣習」と植民地支配——1908年から1923年までを中心に」『ジェンダー史学』7号。

域だった。朝鮮女性の日本留学は 1890 年後半から始まった⁽⁹⁾が、女子留学生の団体が組織されるほど、留学生が増えるのは「韓国併合」後のことである。折しも 1913 年には日本・朝鮮・満洲相互間の連絡輸送が確立し、これに連動して輸送力増強のために関釜連絡船にも大型新造船が投入され、1914 年からの第一次世界大戦による空前の好景気がこれに拍車をかけ、日本の都市社会にも変貌をもたらした。

表 1 朝鮮女子留学生数

年度	東京	その他	総計
1909	不明	不明	9
1910	不明	不明	34
1914	不明	不明	40 ¹⁾
1918	26	18	44 ²⁾
1920	不明	不明	42 ³⁾

表 2 朝鮮男子留学生数

年度	学生数
1909	221
1910 ⁴⁾	386
1911	542
1912	560
1913	537
1915	441
1917	589
1920 ⁵⁾	1,085

出所：表 1 は백옥경「近代韓国女性の日本留学と女性の現実意識（근대 한국여성의 일본유학과 여성현실의식）」『梨花史学研究』39号，2009年，5頁をもとに作成。ただし，백論文では1914年の留学生数を30人としている。

表 2 の 1909 年の数値は백옥경 2009 前掲書より重引。1915 年，1917 年の数値は朴慶植編『在日朝鮮人関係資料集成』第 1 巻，三一書房，1975 年より重引。

1) 『毎日新報』1914年4月9日。

2) 『毎日新報』1918年9月15日。

3) 朴宣美 (2005) 『朝鮮女性の知の回遊』山川出版社，28頁では145人となっている。

4) 5) 朴宣美 (2005) 前掲書から重引。

(9) 尹貞媛 (1883-?) は日本での留学後，ベルギー，イギリス，フランス，ドイツ各地を巡って音楽と語学の研修を受け，政府の要請で漢城高等女学校教員に就任するが，「韓国併合」後に退職し，1911年に北京に亡命し，消息不明となる（洪良姫「尹貞媛」『イットゥデイ (이투데이)』2017年7月24日，<http://www.etoday.co.kr/news/section/newsview.php?idxno=1518609> (2019年1月6日アクセス)。

世紀転換期に初めてアメリカで学士を得た河蘭史 (1868-1919) は留学後，梨花学堂の教壇に立ちながら女子教育の必要性を説いた。1919年のパリ平和会議に女性代表として参加を企図するも日本警察に阻まれ北京亡命後に客死する。

このように初期の女子留学生は政府高官の家族である場合が多いが，帰国後に険しい人生が待ち受けていたところが日本の女子留学生との大きな違いである。

1896年に朴妙玉が父親の朴泳孝の日本亡命に同行して長崎の活水女学校に留学している。後に神戸の親和女学校で6年間学び，1907年に帰国している。1898年に尹孝貞の娘の尹貞媛が明治女学校に留学している（백옥경 2009，表 1 出所参照）。

1909年に9人だった女子留学生は、1910年代になっても40人を大きく越えなかったのは、女性が留学すること自体がさまざまな困難を伴ったからである（前頁表1）。

朝鮮の女子留学生政策は日本や中国にはるかに後れを取っている。それは第1に1905年の乙巳保護条約以降、日本に主権を奪われたこととも関わる。第2に限られた国家財政から官費で留学に送るのは男子が優先された。1900年から1910年代まで30～40人の官費留学を送るが、官費留学は私費留学を志望する男子の促進剤となった（前頁表2）。

しかし女子の場合は1910年代には官費留学は見られずほぼ全員が私費留学である⁽¹⁰⁾。

武断統治下にあった1910年代は日本への留学に対して抑制政策がとられていた。

1911年に「朝鮮総督府留学生規定」が制定されるが、その内容は私費の場合、事前に履修学科、入学及び出発時期を明記し、履歴書添付のうえ、地方長官を経て朝鮮総督府に提出の義務が課されていた。

地方長官は留学当事者の人柄、保護者の職業、財産状況まで調査し、報告していた。さらに学費納入の保証人2人の連名保証書まで必要としたために、留学そのものが狭き門で、裕福な家庭の家族か、欧米宣教師などの特別な援助がなければ不可能だった。

女子留学生の多くがキリスト教信者の家庭から出ている⁽¹¹⁾が、西洋文明に接するのが裕福で知的な階層で可能だった時代状況と関わる。

1910年代に日本へ留学した女性の出身校を見ると、大部分が京城女高普（漢城女学校の後身）、進明女高普、貞信女高普、梨花女高普であり、さらに淑明女高普、平壤の崇義女高普が後続する⁽¹²⁾。私学の多くは欧米の宣教師によって開設された学校であるが、要するにソウルや平壤のような主要都市の学校に在籍しなければ留学の情報すら入手できなかったのである。

ともあれ、幾つものハードルを克服して留学しようとするだけあって、当事者の留学への熱意も並々ならぬものがあった。

（4）東京女子留学生親睦会

初期の女子留学生が多くソウル出身であったように彼女たちの行きつく先も帝都、東京だった。

進学先での専攻分野は医学がもっとも多く、次に師範学校、英語英文学、音楽、神学、美術の順に続いた。植民地支配下にあつて女性がまずは経済的に自立するためのツールとして医学、師範科を選んだのに対し、男子の場合は法政、経済、社会分野に集中している⁽¹³⁾ところにも朝鮮のジェンダー秩序がうかがえる。

1915年4月3日に、金弼礼（金マリアの父の妹）、羅蕙錫、金貞愛らが発起人となり結成された

(10) 1920年で官費女子留学生は4人（11%）、1926年で12人（15%）、1928年で20人（24%）となっている（朴宣美（2005）前掲書、34頁）。

(11) 朴宣美（2005）前掲書、37頁。

(12) 朴貞愛（2000）「1910年～1920年代初半女子日本留学生目録（1910년～1920년대 초반 여자일본유학생 목록）」『女性文学研究（여성문학연구）』3号。金夏娟（2010）「近代朝鮮の女性教育に関する資料調査——女子高等普通学校の記録を中心に」、http://www.cf.ocha.ac.jp/igl/j/menu/leadership/groupingmenu/training/d003631_d/fil/KimHayeonReport.pdf（2019年1月6日アクセス）。

(13) 朴貞愛（2000）前掲論文。

東京女子留学生親睦会は、「在京の朝鮮女子相互の親睦を図り品性を涵養すること」を設立趣旨とし、初代会長に金弼礼が就いている。

同会の活動は、植民地朝鮮で女性が置かれている特殊な問題に関心をもたせ、女性問題を社会問題の一環として提起する基盤となった。

1907年10月の臨時総会において、東京女子留学生親睦会が本部として日本各地の女子留学生団体をまとめるようになるのは、会長に選出された金マリアの功績が大きい。

同会は1920年には劉英俊、玄德信、丁七星、朴承浩（朴忠愛）、李賢卿、金善、朴順天、林孝貞、李淑鍾、韓小濟、黃信徳たちを主要メンバーに擁して朝鮮女子興学会と改称し、3・1独立運動後の京城、平壤、釜山、馬山、大邱など朝鮮の各都市を巡回しながら新思想、新知識の普及に努力する。

機関誌として発行した『女子界』（資料4）の第1号は1917年春に謄写版で出されたが、同年6月末に当局の認可を受けて活版印刷したものを公式の創刊号とした。金徳成、許英肅、黃愛施徳、羅蕙錫らが編集に携わり、顧問に田栄沢、李光洙が加わった。

初めは女子留学生向けのニューズレター的なものだったが、徐々に朝鮮内の女性に向けた啓蒙誌として内容を整える。家族制度の近代化をめざす李光洙たちの考えと、ジェンダー秩序を変革しようとする女子留学生の使命感が合わさった結果である。

当初は季刊をめざしたものの、結果的には1920年6月に出された第5号で終刊する⁽¹⁴⁾。

(5) 2・8独立宣言と女子留学生

「民族の大事を男性だけで行うというのですか？ 車は両輪で走るものです！」⁽¹⁵⁾。

民族独立について議論する男子留学生を前にして、こう言い放った女子留学生がいた。

朝鮮の開化期以降、朝鮮から日本にやってくる留学生の圧倒的多数は男性で、しかも時代のエリートであった。女子留学生があまりいなかったということもあるが、男子留学生の多くは女性の存在を軽視し、民族的な課題を女性とともに取り組むなど期待もしなかった。

そんな彼らの性差別的な意識を真っ向から批判し、歴史的な2・8独立宣言に参加したのが黃愛施徳（黄エスター）であり、彼女の横には常に同志の金瑪利亞（金マリア）たちがいた。

いまだ男女平等という考え方が広く共有されない時代にあつて、黄エスターがこのような発言を



(14) 全6号刊行、再刊4号で休刊するという説（孫知延（2004）「植民地エリートたちの近代と女性解放論」『名古屋大学 国語国文学』94号）、2号（1918年3月）、3号（1918年9月）、4号（1920年3月）、5号（1920年6月）、6号（1921年1月）、再刊4号（1927年1月）があるという説がある、<https://terms.naver.com/entry.nhn?docId=5569513&cid=41708&categoryId=60369>（2019年1月13日アクセス）。延世大学に2号、3号、4号、再刊4号が所蔵。崔惠隣（2013）「植民地近代女性の主体と民族意識」（『言語・地域文化研究』19、東京外国語大学）。

(15) 「黄愛施徳」『韓国女性独立運動史——3・1運動60周年記念』3・1女性同志会、1980年。崔恩喜（1985）「神が育てた一粒の麦——黄愛施徳」『韓国開化女性列伝』正音社。朴容玉（2003）『金マリア——私は大韓の独立と結婚した』ホンソン社。

し、宣言に女子留学生が参加したことの意義はきわめて大きい。

(6) 金瑪利亞（金マリア）と黄愛施徳（黄エスター）⁽¹⁶⁾

1903年に大阪で内国勸業博覧会、1907年には東京で東京勸業博覧会が開かれたが、両博覧会で朝鮮女性が「遊女」「賤業婦」として展示された⁽¹⁷⁾。大阪での展示を目撃した朝鮮男性の抗議により、女性たちは展示途中で帰国したが、にもかかわらず東京でも同様の展示がなされていた。

氷山の一角として、このように日本の近代化を学びに来たであろう朝鮮男性ですら民族的屈辱感を味わう日常が待ち構えていた。ましてや朝鮮女性たちは当事者としてこの屈辱感に立ち会わなければならなかったのである。

金マリアのような女性が経験する宗主国の日本は、民族独立への思いをいっそう強くする政治的現場でもあった。

金マリアは1892年に黄海道長淵郡松川里の富裕で開明的なクリスチャン家庭の3女として生まれるが⁽¹⁸⁾、山川菊栄（1890年生まれ）、市川房枝（1893年生まれ）とはほぼ同時代に生きたといえる。

故郷の松川里は朝鮮でいち早くキリスト教を受け入れた地域だが、その中心にいたのが、マリアの父であり、徐丙浩の父だった。ちなみに徐丙浩は朝鮮で初めて幼児洗礼を受け、後にマリアの父の妹、求礼の夫となる人物である。

キリスト教への警戒や不信感が強い時代にあって、信仰すること自体が体制的価値への挑戦でもあり、新秩序への希求でもあった。瑪利亞とは、そのような信仰と思想をもつ父親が洗礼名マリアに漢字をあてた名であった。

父母が早世したために1906年にセブランス病院に勤める叔父、金弼淳を頼ってソウルに移る。叔父の家には朝鮮の思想界をリードした金奎植（後に父方の叔母・金淳愛と結婚）や盧伯麟、李東輝などが出入りし、彼らからも思想的影響を受ける。

転校した蓮洞女学校（貞信女学校の前身）を1910年に卒業し、光州とソウルで教職に就く。その間に1年間広島高等女学校で日本語、英語を学ぶが、本格的に留学するようになるのは1915年のことである。叔母の金弼礼がすでに東京に留学していたこと、母校のルイス校長（宣教師）の勧めなどがあって実現した留学だ。女子学院本科、つづいて高等科英文科に進学する。

一方の黄エスターは平壤郊外で漢学者の父とキリスト教を信仰する母との間の2男6女の4女として生まれる。金マリアとは同い年である。

(16) 『女性学事典』（岩波書店、2002年）は上野千鶴子、加納実紀代といった日本の代表的な女性学者による編集だが、金マリア、黄エスターは単独の項目にはなく、3・1運動の項目で紹介されているだけである。しかし韓国では単独で紹介されている金活蘭より金マリアの方が社会的評価を受けている。それだけ日本では朝鮮女性について知られていないといえる。

(17) 人類館事件、すなわち設営された「学術人類館」に沖縄の「遊女」が「琉球の貴婦人」として展示されたことに対し、沖縄人が抗議し、展示を中止に追い込んだ事件も大阪勸業博覧会での出来事だった。展示されたのはほかに朝鮮人、アイヌ民族、台湾先住民である。ちなみに1903年に日本在留朝鮮人の数は224人、1907年には459人となっている（『日本帝国統計年鑑』各年版による）。

(18) 生年を1891年とする研究もあるが、ここでは長年金マリア研究をしてきた朴容玉（2003）前掲書により1892年とする。

家族が1904年に平壤市内に移ると、エスターの年齢は学齢期を過ぎていたが父親を説き伏せて学校の門をくぐる。飛び級を重ねた結果、女子としては平壤初の女学校卒業生となり、宣教師の斡旋でソウルの梨花学堂で中等科課程を修了する。平壤の崇義女学校(資料5)に教師として就職した時点では19歳になっていた。

親は適齢期の娘に結婚を迫るが、その圧力にも屈せず再び梨花学堂大学科、総督府医学校での課程を終え、再び崇義女学校の教員に戻る。

崇義女学校では1913年に教師、学生、卒業生が中核となって秘密結社「松竹決死隊」が組織され、独立運動を支え、学校関係者から活動家も多く輩出する。

黄エスターは金敬喜(1889-1920)が上海に亡命した後に代表として任務を引き継いだ。平壤の崇義女学校は1938年3月末に神社参拝に抵抗して廃校しているように、他の女子教育機関よりも抗日の校風を貫いたところだ。崇義女学校で実践を積んだエスターは1917年9月に東京女子医学専門学校に進学する。

一方、金マリアも姻戚の徐丙浩たちの上海での独立運動について聞き知っていた。1918年8月に呂運亨たちが結成した新韓青年党は、金奎植をパリ講和会議に、徐丙浩を朝鮮に、その他の党員を日本、露領、満州に派遣して独立運動の協議を進めていた。

1918年10月に東京女子留學生親睦会会長に就いた金マリアは、同じ志をもつ黄エスターと出会い、以後、2人は緊密な関係を築いていく。

1918年1月のアメリカのウィルソン大統領の民族自決主義の提唱にも励まされたが、留學生の心を動かしたのは、日本で発行されている英字新聞『Japan Advertiser』12月1日の記事だった。そこには在米朝鮮人がパリの講和会議に独立を訴えるために派遣されたことが書かれていた⁽¹⁹⁾。

ちなみにパリ講和会議に派遣された金奎植は、3・1独立運動が高揚した時期に徐丙浩の仲媒でマリアの叔母、金淳愛と結婚している。同じくパリ講和会議に参加しようとした梨花学堂教師の河蘭史が日本の警察の妨害を受け、行方不明になっていることも伝え聞いていた可能性もある。

1918年年末、1919年年初に開催された朝鮮人留學生の雄弁大会では、独立運動の先頭に立とうと呼びかける弁論が続くが、呼びかけの対象は男子留學生に向けられていた。

黄エスター、金マリアともにそこに参加していたが、黄エスターが冒頭の爆弾発言を投げかけたのはまさにこの時だった。彼女たちの熱い思い、実践力を認めた男子留學生は女子留學生との共闘を認める。

2月8日、学友会総会という名目で東京YMCAに300余名の留學生が集まるなか、独立宣言文発表がなされた。その場に金マリア、黄エスター、盧徳信、劉英俊、朴貞子、崔濟淑が参加しても結果的には宣言文に女性の名前は列記されなかった。

資料5 崇義女学校 1934年の全景



(19) 崔承萬(1985)『私の回顧録』仁荷大学出版部、80頁。

資料6 大韓独立女子宣言書
(韓国学中央研究院提供)



発表と同時に宣言に関わった男子留学生はその場で逮捕されたが、金マリアも女子学院で逮捕され、警察で取り調べを受ける。要注意人物として官憲に監視されるのは女子留学生として例外ではなかった。

釈放後に、金マリア、黄エスターはともに学業を中断して、2・8独立宣言文を朝鮮に持ち帰ることを決める。

同じ時期に中国吉林省ではハングルだけで書かれた「大韓独立女子宣言書」が発表されている(資料6)。「悲しく悔しい。わが大韓同胞の皆様、チャン

スは再び訪れ来ることはなく、時宜を逃せば決起できないゆえ、急いで奮闘しましょう。同胞の皆様万歳！」と書き始められた宣言文の骨子は、女性は英雄豪傑も凌駕する力量があるので尚武精神で闘争の隊列に加わるべきだと鼓舞している。

韓紙(49センチ×31センチ)に筆で書かれた宣言文には女性8人の署名がある。この貴重な資料は、1983年に安昌浩の長女宅(ロサンゼルス)で発見されている⁽²⁰⁾。

女性たちは朝鮮、日本、中国、ソ連、アメリカなどでそれぞれの場で独立運動の隊列に加わる準備をしていたのだ。

3 女性たちの「独立戦争」—— 3・1独立運動以後

(1) 女性の3・1独立運動参加

マリアは同志と連絡をとりながら、変装用の和服の帯に筆写した宣言文を隠して朝鮮へ持ち帰った。官憲史料に「所在を韜晦」するために各地を転々としながら「独立運動に奔走」したとある⁽²¹⁾ように、2月17日に釜山に上陸し、大邱、光州、ソウルと各地を移動する。大邱では徐丙浩と叔母の金淳愛に出会い、ともに他の叔母たちが教師をしている光州に入り、さらにソウル、黄海道の各地で独立運動の足場を広げる運動を続ける。

3・1独立宣言文が発表された日の翌日、3月2日にマリア、エスターは梨花学堂教師の朴仁徳の部屋で、朴仁徳の同僚の申俊勳・朴勝一・金ハルノン、留学生仲間だった羅蕙錫、梨花学堂の女子学生たちを交えて会合をもった。

そこでマリアが訴えたのは組織的で恒常的な運動をするための女性組織が必要だということだった。街頭に出て「独立万歳！」を叫ぶデモの一過性を憂慮していたのである。

しかしマリアは3月6日に母校の貞信女学校にたどり着いたところで官憲に逮捕される。連行されたのは南山麓の俗称、倭城台と呼ばれる総督府警務總監部だった。そこは警察組織を統率する最高の指揮本部として、抗日運動のリーダーを苛酷に取り調べ、生きては出られないと人びとから恐

(20) 『東亜日報』2007年11月3日。

(21) 「大正9年6月30日 朝鮮人概況」朴慶植編(1975)『在日朝鮮人関係資料集成』第1巻、三一書房。

れられていたところだ。

2日のマリアが主導した会合に参加した女性たちは順次逮捕されていったが、倭城台に連行されたのはマリアだけだった。この取り調べ過程で受けた拷問がもとでマリアは生涯、上顎骨蓄膿症という難病に苦しめられることになる。

後の資料8、10と比べると、資料7のむくんだ顔から取り調べの過酷さがいくらかは想像できるだろう。

マリアは倭城台での尋問から20日後に西大門刑務所の独房に収監されるが、黄エスターは逮捕の翌日に西大門刑務所に移監されており、その房にはすでに羅蕙錫が収監されていた。倭城台への連行、尋問に要した日数、独房といったことから、いかに金マリアが重要人物としてマークされていたか、言い換えると金マリアの指導力、求心力、マリアに連なる人脈が植民地権力からいかに評価され、警戒されていたかがわかる。

マリアたちが独立運動のための女性組織が必要だと室内で議論したことが保安法違反となり、およそ140日後の7月24日になってようやく仮釈放され、8月4日に京城地方法院で予審終結が決定する。

資料7 金マリア，受刑者記録表



資料8 マリアの家族。左から金淳愛，金奎植，金マリア，金弼淳



김순애
건국훈장 독립장

남편 김규식
건국훈장 대한민국장

조카 김마리아
건국훈장 독립장

오빠 김필순
건국훈장 애족장

出所：KBS，3・1節のドキュメンタリー番組「3月1日，ある一門の選択」を紹介した記事
「金淳愛一族の照明」『국제신문（国際新聞）』2017年3月1日より重引。

(2) 大韓民国愛国婦人会——「独立戦争」へのチャレンジ

その間、拷問により健康を損ねたマリアは、金弼淳が勤めるセブランズ病院で療養するが、そこは看護師の李貞淑が、1919年4月に樹立した上海の大韓民国臨時政府（以下、臨時政府）と連携しながら組織した「大韓民国愛国婦人会」の根拠地でもあった。セブランズ病院には独立運動を支持する意識的な看護師が同会に多く加入していた。

退院後に母校、貞信女学校の教壇に戻ったマリアは、副校長のLillian Dean Miller（朝鮮名、チョン・ミレ）宣教師の自宅2階に住むことになるが、そこで10月19日に女性界の代表が集まり、マリアとエスターの出獄祝いが催された。

この日の集まりによって「大韓民国愛国婦人会」（以下、愛国婦人会）が再編され、会長に金マリアが就任する。

新しく立て直された愛国婦人会は帝国日本との闘いを独立戦争と捉え、武装闘争にも積極的に参加することを掲げたところに、

資料9 番号順に、1金英順、2黄エステル、3李恵卿、4辛義卿、5張善禧、6李貞淑、7白信永、8金マリア、9俞仁卿



出所：朴容玉（2003）前掲書，197頁より重引。

従来の女性組織と異なる点がある。独立資金を臨時政府に送るなどの補助的な活動ではなく、女性が主体的に闘う意志を会の趣旨に示した。

結成当初のメンバーは、セブランス病院、東大門婦人病院の看護師が全体61人の約半数、貞信女学校関係者が約20%で構成されたが、1カ月後にはハワイ、間島まで支部を設置し、2千人の会員を擁するところまで発展した。

徹底した監視のもとで、身の危険を顧みず闘い続けるマリアだったが、植民地権力の弾圧を恐れた呉玄洲の密告でマリアたちの動きは当局の知るところとなり、マリアは11月28日にふたたび悪名高い鍾路警察に連行され、翌日に大邱に送られた。

逮捕された52人のうち、43人が不起訴放免、中核の幹部18人が大邱地方法院検事局に移送されるが、資料9の9人が大邱刑務所に送致される。11月末の大邱は盆地特有の底冷えする地域だが、呉玄洲から情報を引き出したのが大邱警察と関連する者だったために、ソウルから約300キロ離れた大邱に送ら

資料10 『東亜日報』1920年6月9日

れたのだ。

すさまじい拷問・尋問⁽²²⁾によりマリアは起き上がることもできず、翌1920年6月末の大邱地方法院の公判の判決法廷に出廷できなかった。公判の結果、金マリア、黄エスターは3年、張善禧、金英順、李恵卿は2年、その他のメンバーは1年の刑が言い渡された（前頁資料10）。

1921年1月にマリアたちは京城高等法院刑事部に上告するが、6月20日の最終判決に対する上告は棄却され、マリアとエスターの3年の刑が確定する。この時もマリアは病で出廷できなかった。

(3) マリアの中国亡命、臨時政府での活動

病気が快復しても苛酷な刑務所生活が待ち構えている。そんなマリアを救出すべく上海臨時政府は綿密な計画を立てる。上海臨時政府の要員である尹応念が朝鮮にひそかに派遣され、病氣保釈で病院に入院しているマリアに中国亡命を説き伏せる。

尹の手引きで中国女性に扮装したマリアは仁川から威海衛へと無事たどり着くが、嚴重な警戒網をくぐって脱出に成功したのは地下ネットワークのもとで用意周到な準備があったからである。マリア一行が威海衛に着いたのは7月21日のことである。

1934年6月2日付の『京城日報』にマリアの亡命に関する記事がある。その内容は金道順という22歳の女性が「赤色読書会」に関連して仁川署に逮捕されるものだが、その女性の父親（済州島出身）が尹に協力してマリアの亡命を助けたというのだ。

1934年はすでにマリアが朝鮮に戻ってきている時期なので、この記事にどんな政治的意図があるのかは不明だが、マリアが上海臨時政府に至るまで多くの人に助けられたのは事実である。

金マリアの脱出成功は植民地権力のメンツをつぶし、反対に植民地下で呻吟する朝鮮民衆が快哉を叫んだことは、関連記事が民族紙に掲載された頻度からもうかがえる（資料11）。

上海では多くの朝鮮女性が活躍していたが、そのなかには平壤で松竹決死隊の初代表を務め

資料11 (左)『東亜日報』1921年8月5日
(右)『東亜日報』1925年8月15日

マリアの脱出の顛末を説明する記事は17日まで3回連載される。



(22) 3・1独立運動で逮捕された女性たちへ加えられる性拷問について、当時モリアルタイムで『China Press』、『大陸報』、上海の『独立新聞』などが報じていた。

た金敬喜もいた。彼女は崇義女学校の教師時代、授業中に安重根の記念碑をハルビンで建てようと言ったことで逮捕され、それがもとで学校を辞めざるをえなくなる。3・1運動に参加した後は上海に亡命して活動を続けるが、結核がもとで1920年に早世する。

亡命後のマリアにとっての最優先課題は健康回復だったが、いくぶん快方に向かった頃、南京の金陵大学(キリスト教系私立大学)に入学し、そこで中国語を学ぶ。

パリ講和会議に見られたようになってもおも盤石な帝国主義の共犯関係に比し、被抑圧民族の力量は弱く、朝鮮の独立運動も長期化するにつれ内部の意見対立が表面化してきた。社会主義という魅力的な新思潮は闘う側に希望と分裂をもたらした。

独立運動勢力の統合を模索するために上海で国民代表会議が2年間の準備期間を経て1923年1月3日に始まる。臨時議長に安昌浩が選ばれ、およそ5カ月ものあいだ延々と議論されたが、臨時政府のヴィジョンについての統一見解は得られなかった。

マリアは会議の代表資格で参加し、安昌浩と同じく臨時政府を立て直す意見を支持したが、結論を見ないままの閉会がマリアをアメリカ留学へと決意させる。

(4) マリア、10年に及ぶ渡米生活

6月21日に中国人の旅券をもって上海を発ち、7月12日にサンフランシスコに到着する。以後、ロサンゼルス、ミズーリ州・カンザスシティ、シカゴ、ニューヨークと転々としながら、最後はコロンビア大学で教育学、神学を修める一方で槿花会(在米大韓民国愛国婦人会)も組織する。

「祖国の土をふたたび踏み、お姉さんたちとひもじさと苦痛を分かち合いたい。朝鮮民族は内外を問わずその地位は悪く、みな等しく苦しんでいます」⁽²³⁾。

姉宛の手紙にこう書かれたように、アメリカにあっても人種差別や世界金融恐慌による不況などにより留学生にとっては困難な日々が続いた。マリアは刑期の法定時効が満了した時期に朝鮮へ戻ることを決意し、トロント、バンクーバー経由で1932年7月に神戸に到着する。神戸では水上警察に連行され、取り調べを受けるが、ようやく10年ぶりに朝鮮に戻ることができたのは7月10日だった。

日本は中国で、満州事変、上海第一次事変を起こし、満州を建国する。朝鮮をめぐる情勢は大きく動きつつあった。

当局がマリアに求めた条件は、元山の神学校にとどまる、すなわち幽閉に甘んじることを意味したが、それでもマリアは皇民化政策の真髄ともいえる神社参拝にぎりぎり抵抗しながら1944年3月、最期を迎えるまで民族独立を願って命の火を燃やし続けた。

(5) 刑期を終えた黄エスターのその後

刑期1年を残して仮出獄したエスターは梨花学堂大学部に編入し、卒業後は梨花学堂の教員兼舎監になる。女性教育を促進するために米国留学を決意し、1925年に渡米。コロンビア大学で教育学、ペンシルバニア大学で農学を学び、1928年秋に朝鮮に戻る。

(23) 金ヨンサム(1983)『金マリア』韓国神学研究所。

その後、監理教神学校農村事業科の教員として農村啓蒙に尽力する。1930年に結婚し、夫とともにハルビンの農村に赴き、そこで働く同胞の農業知識の啓蒙活動を続ける。

4 朝鮮女性の視点から見なおす 3・1 独立運動

金マリアを中心にして、2・8独立宣言から3・1独立運動へと民族の独立を願って苦闘してきた女性たちの思想と行動はどのように語られてきたのか。

金マリアは柳寛順とともに朴正熙の軍事クーデター後の1962年3月1日に建国功労勲章を授与した205人に入っている。

周知のように朴正熙は、満州軍官学校を経て日本陸軍士官学校に特典入学した人物であり、その経歴はまぎれもなく帝国日本に協力した「親日派」である。そんな人物が民族主義陣営の独立運動家を褒賞することで、「親日派」の過去を消去しようとした。

前述したように、褒賞された女性のうちでシンボルとなったのは柳寛順である。無垢の少女が非暴力で帝国日本に抵抗し獄死した物語は、元皇国臣民の「民族主義」者にとっては自らの過去を消去する魔法の広告塔であった。

柳寛順よりも長く活動した金マリアは、柳寛順とは別な語りがされ、都合の悪い部分は切り捨てられてきた。

マリアがこれまで「正統民族主義者」として高く評価されてきたことは、『나라사랑 (民族愛)』⁽²⁴⁾ 30号(1978年)で特集が組まれたことなどでもわかる。前述のようにマリア一家は何人も建国功労章受章者を出している「名門」で、韓国正史において瑕疵のないモデルケースである。

しかし韓国で民主化が実現し、フェミニズムが発言力をもった1990年代から、「官製民族主義」のポリティクスに対する反発から、民族主義そのものを否定する声が高まる。すなわち民族主義とは必然的に女性を抑圧するものであり、民族運動に参加した女性は女性の国民化をめざしたがゆえに、むしろ家父長制を強化する共犯者なのだという。

羅蕙錫のようなセクシュアリティにまで踏み込んで平等を訴えた新女性への過大評価⁽²⁵⁾とは対極にある。

前述のように、日本の女性学研究者にも金マリアは金活蘭ほどにも知られていない。

このように金マリアは「官製民族主義」に利用される一方で、韓国のフェミニストからも右派民族主義者として過小評価されてきたのだが、これらに対し筆者は異議申し立てをせざるを得ない。

上海臨時政府の憲章の第3条は「大韓民国の人民は男女、貴賤および貧富の階級がなく、一切平等である」ことを謳っている。就学率などの女性の近代化において進んでいた日本でも、両性の平等が法制化されるのは第二次世界大戦後であることに鑑みると、この条文の先駆的意義に気づかれよう。これは金マリアたちの闘いがあるからこそその成果である。

(24) 白楽濬編集，正音社。

(25) ポスト構造主義の影響が韓国に及んだ頃、家父長制批判とともに羅蕙錫研究が盛んになる。1995年から本格的な研究が現れ、現在ではもっとも多く研究されている女性となっている。2012年に羅蕙錫学会が発足し、『羅蕙錫研究』が刊行される（羅蕙錫学会『羅蕙錫研究叢書1・2』2015年参照）。

1922年、モスクワで開かれた極東民族会議にはマリアが派遣される予定だったが、健康上の理由から金元慶と権愛羅が代わりに派遣された。

金元慶は婦人分科会で「朝鮮の婦人」と題して報告し、3・1独立運動の女性の闘い、帝国日本の残忍な弾圧ぶりを訴えた。日本から参加した片山潜は彼女の報告を聞き、心動かされたのか、朝鮮から来た女性を伴いレーニンを表敬訪問している。

残念ながら金マリアは自己の思想と行動を饒舌に書き残していない。帝国日本と闘ううえで記録は証拠となり、弾圧の口実になるからだ。数少ない記録に、記名はないが金マリアのものだと伝えられる「女子教育論」(『女子界』3号)がある。

それによると女性が裁縫や料理に専念し、夫に仕えるのは時代錯誤であり、「人は人として尊重される価値がある。まず人を造った後に女性を造ったのです」と書いている。マリアはそのほかの書簡や評論にも女性解放という言葉を何度か使っているが、その女性解放の前提に民族解放がなされるべきだと考えていたようだ。

本稿の金マリアに関する実証部分は、朴容玉の『金マリア』研究に多く負っている。韓国における女性史研究の第一人者である朴容玉が、ライフワークとして内外の資料を発掘・渉猟してまとめた本書は金マリア研究の金字塔である。

しかし残念ながら、ここではマリアと親交のあった朴仁徳、あるいは黄エスターの妹の信徳、金活蘭たちがなぜ帝国日本の侵略戦争に協力していったのかについての言及、考察はない。言い換えると金マリアの思想を「官製民族主義」から解き放ち、ジェンダーの視点から彼女の思想を再照明する課題は残されている。

マリアは女性解放の前提に民族解放があると主張したが、朴仁徳や金活蘭は植民地近代下の女権伸長策を支持し、帝国日本の繁栄のもとで女性の権利伸長にあずかろうと転向していった。

1987年の韓国の民主化は、それまでタブーだった社会主義者についての研究を促し、人権という観点から性暴力の問題を捉えなおす契機をもたらした。

金マリアは、上海にいた時に安昌浩と金綴洙(資料12の右半分、1893-1986)から結婚相手に社会主義者の張ジンヨンを紹介されている。張は金マリアが病身だと知りながらも承諾したそうだ。張は東京高等師範学校の出身で、金綴洙とはシベリアで知遇を得た人物だ。しかし金マリアはこの申し出を受け入れなかった。

資料12 イム・キョンソクの歴史劇場「残酷な拷問に打ち勝った朝鮮の革命女傑」



出所:『ハンギョレ 21』2018年1月18日より重引(左半分は金マリア、右半分は金綴洙)。

金マリアが金綴洙に信頼を寄せていることを知る友人が、2人の間を仲媒しようとしたが、故郷に妻を残してきた金綴洙は金マリアへの思慕の念に揺れたが、結局は友人の気遣いを辞退した⁽²⁶⁾。

金綴洙は朝鮮共産党の責任秘書を務めた社会主義者で⁽²⁷⁾、マリアとは国民代表会議で出会っているが、他でもない、社会主義者の金綴洙が、マリアが警察で尋問を受ける際に性拷問を受けたという重要な証言をしているのである⁽²⁸⁾。

金綴洙はマリアの友人からこの事実を聞き知ったのであるが、金綴洙が社会主義者であること、女性に加えられた性拷問を明らかにするほど社会が開かれていなかったなどの諸事情から、このことは長く知られることはなかった。

家父長制の核心は女性の貞節によって支えられ、抗日の思想と行動は女性への性暴力という深刻な挑戦を受ける。それでも敢えて民族解放運動を継続することは植民地主義の核心を衝く思想の営みである。

このような金マリアの経験の過酷さと社会主義者も含む幅広い人たちとの交流が植民地主義への批判を深め、朴仁徳や金活蘭との思想的岐路をもたらしたのであろう。

マリアたちが闘った3・1独立運動は韓末からの女性人権の闘いの到達点であり、それ以後の解放闘争のさらなる出発点となった(資料13)。

資料13 ソウル市銅雀区、ソウル市立ボラメ青少年修練館内の金マリア像



マリアたちの闘いは多くの女性を歴史の主体として招き入れ、彼女たちに数奇な運命を与え、苛酷な人生を歩ませるが、紙幅の関係から3・1独立運動に関わる2人だけを紹介して本稿を終えたい。

朱世竹(1901-1954)

咸鏡南道咸興で生まれ、3・1独立運動に参加する。故郷の病院で勤務した後に上海に渡って修学する間に朴憲永と知り合い、結婚する。ともに朝鮮共産党で活動するが、28年、夫が逮捕され、拷問がもとで病気になるが病気仮釈放を得たあいだにウラジオストクへ脱出する。途中で娘を出産し、1929年モスクワに到達。

1932年、朝鮮共産党再建のために上海に派遣されるが、そこで夫は逮捕され、朝鮮に押送される。夫は死んだものと思い、34年に金丹冶と再婚し、ふたたびモスクワへ行く。スターリンによる強制移住政策で中央アジアに送られるが、夫の金丹冶は日本のスパイ容疑で死刑に処される。朱自身は5年間、カザフスタンに抑留される。46年まで労働者として働き、1954年に結核で死亡する。

李賢卿(1898-?)

京畿道水原市出身。妹、善卿(1902-1921)は3・1独立運動に関連し、警察の拷問がもとで死亡

(26) イム・キョンソク前掲記事(『ハンギョレ21』2018年1月18日)。

(27) 国家報勲処は2005年8月3日、8・15光復節(独立)60周年を迎えて、国内外で抗日運動を展開した214人に褒賞を与えることにしたが、金綴洙など社会主義者の独立運動家47人が含まれている(『中央日報』2005年8月3日)。

(28) 朴容玉(2003)前掲書、229頁。

する⁽²⁹⁾。1917年に京城女子高等普通学校を終えて日本女子大学に留学する。その後、普通学校教師、東亜日報記者を勤め、同志の安光泉と結婚する。

『現代評論』1927年1月から6月まで「経済状態の変遷と女性の地位」と題する論文を連載するほど理論に長け、黄信徳とともに女性の統一戦線である権友会（1927年結成）の規約作成にも関わる。1928年に上海に亡命するが、その後は北京に移り、安光泉、金元鳳、朴次貞、李英俊、朴建雄、朴文昊と朝鮮共産党再建同盟の主要メンバーを務める。

崔恩喜と李賢卿とは日本女子大学でともに学び、下宿をした仲だが、崔恩喜の『祖国をとりもどすまで』（探求堂、1973年）には李賢卿についての記述がない。近しい間柄でも、朴正熙政権時代に社会主義活動をした友人について書くことが困難であったのだろうか。

韓国の民主化により、地域史の掘り起こしが進み、3・1独立運動に関わった李賢卿・李善卿姉妹の生きざまによりやく光が当てられ始めたのである。

一粒の麦は地に落ちて死んでも、長い時を経て多くの果を結ぶ。朝鮮史において連綿と受け継がれた女性たちの経験と思想は、2016年のロウソクデモを経て、朝鮮民族の未完の課題へと向かっている。

（そん・よのく 青山学院大学名誉教授）

(29) 『三千里』17号、1931年7月号。ハン・ドンミン「水原の女性独立運動家 李善卿」『水原博物館ニュース물고을(ムルコウル)』第6号、2011年12月。